

# 太王四神記 第1話 神の子 ファウン

2008(平成20)年1月2日鑑賞<梅田ブルク7>

★★★★



特集

監督=キム・ジョンハク/出演= <神話の時代> ペ・ヨンジュン/ムン・ソリ/イ・ジア  
<高句麗の時代> シム・ウンギョン/オ・グァンロク (2007年韓国ドラマ/66分)

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

…… 50億円を投入した、ヨン様主演、全24話の韓国ドラマがスクリーン上で  
上映！ 第1話は序曲中の序曲で、ファンタジー色あふれる神話の世界が大  
展開！ 玄武、白虎、青龍、朱雀という4つの神器と「転生」を理解するこ  
とが大前提だが、ひょっとして男性客は2人の美女にクラクラ……？

## 壮大な全24話の韓国ドラマをスクリーンで……

総製作費50億円をかけて描く全24話×60分の韓国ドラマが、ヨン様ことペ・ヨンジュン主演の『太王四神記』。日本でもNHKのBSHiで放送を開始しているが、梅田ブルク7ではこれを1話ごとに1週間ずつスクリーンで上映するという企画を実践中。そして2008年正月は、1日～7日の間第1話～第4話を一挙上映することになったため、私は早速これを鑑賞し、1月11日の大阪日日新聞「弁護士坂和章平のLAW DE SHOW」に掲載することに。

この物語は全24話という壮大なものだけに、第1話～第4話はほんの序曲。それでも1話ごとの内容は相当見ごたえがある。しかし、登場人物が多彩であるうえ、たくさんストーリーが絡まりながら展開していくから、早く評論を書いておかなければ忘れてしまう恐れが……。そこで以下、事実誤認や解釈間違いがあることを自覚しつつ、第1話～第4話までの評論を。

## 第1話の導入役は、若きヒョンゴと少女時代のスジニ

映画の冒頭、「スジニは？ スジニは、どこ？」と捜し回る師匠ヒョンゴ(オ・グァンロク)の姿が登場する。そして、師匠をからかうかのように、木の上に座ってい

る弟子の少女スジニ（シム・ウンギョン）の姿を発見。「早く下りてこい」とスジニを諭す（怒る？）ヒョンゴだが、この2人のやりとりはどこかユーモラス。互いに口が悪いから、師匠は弟子を罵倒し、弟子は師匠をからかっているように見えるが、実はこの2人は深い信頼で結ばれていることがよくわかる。

師匠のヒョンゴが弟子のスジニに対して怒っているのは、「なぜ俺の杖を2つに折ったのか」ということ。たしかに、ヒョンゴが持っている杖は2つに折れているが、これはスジニがいたずらしたおかげ……？ そうした師匠の質問にも答えず、また「下りてこい」との命令も無視して、スジニが手を掲げて見上げている視線の先には大きな鳥の姿が。さて、これは何を暗示するのだろうか……？

## コルム村の村長は誰に？

スクリーンは次にコルム村のシーンに移行する。今、自分の死期を悟った老村長は弟子たちを村の中心に集め、何事か決定しようとしていた。それは次期村長を決定すること。全24話×60分という壮大なTVドラマが描く物語の主人公は、韓国の国民的英雄である高句麗の第19代王の広開土大王（375～413年、在位391～413年）。その名前はタムドク（ペ・ヨンジュン）で、日本の教科書には好太王という名前で登場するらしい。

このシーンだけではこの導入部の物語の時代がいつの頃かよくわからないが、4話を通して見るとタムドクとスジニはほぼ同年代だから、4世紀末だということがわかる。そこで興味あるのが4世紀末における村長の決定方式だが、それは今日のような民主主義的ルールによる選出ではなく、きわめて神がかり的でファンタジー色豊かなもの。すなわち、井戸の中から黒い煙が昇ってきて、それが弟子たちに向かって広がっていったかと思うと、煙は光を放つとともにそれがあ人物に集中していった。そしてそれが収まった瞬間、ヒョンゴの手には杖が授けられていた。これによって、弟子たちはみんな、次期村長がヒョンゴに決定したことを納得することに。

## 旅の途中でヒョンゴがスジニに語るのは……？

村長となったヒョンゴが今、行こうとしているのは高句麗の国内（クンネ）城だが、その目的は……？ それは第3話、第4話でポチポチと解き明かされていくが、第1話のメインは、スジニが聞き役、ヒョンゴが語り役となって、今から3000年以上前

の神話の時代の物語。ヒョンゴが語り始めたのは、「昔々、神はファヌン（ペ・ヨンジュン）を地上に遣わし、ファヌンは平和な人間の国チュシン国を築こうとした。チュシン国には何万という人が集まり、平和に暮らしていた。ところが、火の信女であるカジン（ムン・ソリ）たち虎族は、これを侵略しはじめた。そこでファヌンの民たちもやむをえず対抗したが……」というもの。

その語りとともに、スクリーン上は4世紀から神話の時代に一変し、古代スタイルというか神話の時代の服装をしたカジンが登場する。このカジンを演ずるのは、『オアシス』（02年）で脳性麻痺の女性を熱演した演技派女優ムン・ソリ。肩はもとより、足も太もも近くまで露出させながら男勝りの強さで剣を振りまわすムン・ソリのカッコいい姿がここに登場するとともに、『冬ソナ』のヨン様ことペ・ヨンジュンが、白い服をまとい、いかにもイエス・キリストを彷彿させる神の子として登場するからビックリ。あれ、俺が今観ているのは『太王四神記』で、ヨン様は凛々しい甲冑姿に剣を持った姿で登場するのではなかったの、と一瞬錯覚したほど。そう、つまり第1話は全24話で構成されるドラマのホンの導入部ということなのだ。

## 老村長の2つの遺言は……？

今、老村長は臨終の床にあった。ベッドの側には次期村長のヒョンゴ、そしてベッド上の老村長を見守るのは多くの弟子たちだが、そんな中で老村長はヒョンゴに2つの重大な遺言を。

その1は、「高句麗の都へ行け。そして、そこにいるヨン家のホゲという男の子を捜し出せ。彼がもし真のチュシン王なら、我々は彼を守らなければならない。それが玄武の守護神を守る我々の義務だ」というもの。さて、ヨン家のホゲとは一体何者……？ それは第1話では全くわからないが、今ヒョンゴがスジニを伴って高句麗の国内（クンネ）城に向かっているのは、その任務を達成するため。さて、2人の前途にはどんな物語が……？

老村長の遺言その2は、「スジニが黒朱雀になったら、必ずお前の手で殺せ。これは絶対だぞ」というもの。さて、その意味するものは……？ その意味は、神話の世界を描く第1話のラスト近くに、火を噴く巨大な黒朱雀が登場することによって暗示されるが、なるほどそういうことかとストーリーを呑み込めるのは第3話、第4話になってから。したがって、お楽しみはゆっくりと。

## ■四神とは……？ そしてセオとは……？

こんな第1話の目的の第1は、この映画のタイトルとなっている「四神」を理解させること。神の子であるファヌンが、神の国から一緒に連れてきたのが東西南北の守護神。すなわち四神とは、①玄武は水を司る北方の守護神（雨師）、②白虎は鉄を操る西方の守護神（風伯）、③青龍は木を司る東方の守護神（雲師）、④朱雀は火を司る南方の守護神だ。そして、①雨師、②風伯、③雲師がどんな姿をしているかは、第1話のラストにおけるクライマックスシーンで明らかになるからお楽しみに。

他方、ファヌンは自ら戦いながらも人間の争いの悲しさに涙している人間に注目。それが熊族の女セオ（イ・ジア）だ。彼女は清楚な顔立ちながら弓矢を得意とする女性で、熊族のリーダーとして大活躍。そして、ある日、カジンから奪った火の力を閉じ込めた「紅玉」をファヌンが与えたのがこのセオ。さらに、ファヌンは神に対して、セオが私の子を産むでしょうと宣言。つまり、セオはファヌンの愛を一身に受けることになったわけだ。

このような神話の世界において発生したのが、ファヌンをめぐって虎族の女カジンの熊族の女セオに対する嫉妬心から生じたトラブル。おっと、話が飛んでしまった。それは追って説明するとして、まず第1に大切なことは、この四神を理解することだ。

## ■転生とは……？

第1話の目的の第2は、転生という概念を理解させること。日本でも山田風太郎の小説『魔界転生』が有名だし、平山秀幸監督の『魔界転生』（03年）の映画が有名。これは天草四郎時貞が魔界に転生するという奇想天外な物語だったが、転生とは、時代を大きく変えて生まれ変わること。4つの神サマは第1話では巨大な動物の姿で登場するが、神サマが人間の姿に変える、すなわち擬人化することはよくある話。つまり、『太王四神記』は、この擬人化して高句麗の時代に転出してきた四神たちが主人公として活躍するドラマなのだ。

すると、「黒朱雀になれば殺せ」と言われたあのかわいい少女スジニは、ひょっとして火を司る朱雀の転生した姿……？ また、コルム村の村長に選ばれたヒョンゴは、水を司る北方の守護神玄武の転生した姿……？ すると、カジンは……？ また、ファヌンは……？ 第1話は、観客にそんな疑問と興味をもたせることを目的とした壮

大なドラマの序曲。そのためには、まず四神と転生を理解しておかなければ……。

## 韓国のキリスト教信者は……？

人口13億人の中国における共産党員の数は2007年6月現在約7300万人だが、最近よく報じられているのは、キリスト教信者はそれより多く9000万人以上もいるらしいこと。もっとも、中国ではキリスト教は認められていないので、みんな地下教会で活動しているとのことだから大変。2008年8月8日の北京オリンピックを控えて弁護士などの人権活動家に対する弾圧を強めている中国が、今後地下キリスト教に対してどのように対応していくのか注目されるどころ。

こんな風に、命がけでキリスト教信者になる中国と比べると、日本人は結婚式を教会でといういい加減な人種だが、韓国では……？ 日本人はあまり知らないようだが、韓国の宗教ではキリスト教が最大で、29.2%がキリスト教信者だと言われている。そんな韓国だから、第1話であのヨン様が神の子として高貴な姿をお見せになることに対する抵抗は少ないかもしれないが、日本のヨン様ファンのおばさま族はちょっとビックリしたのでは……？

もっとも、微笑みを浮かべたそのやさしい顔は高貴な雰囲気とピッタリ。したがって、猛々しく剣を持ってファヌンに向かおうとした虎族の美女カジンが一瞬臆抜け状態となったのは当然。しかも、矢で射られ傷ついたカジンの背中からその矢を抜き、お手を添えられるとたちまち傷は癒えたから、まさにファヌンは神の子。こんなファヌンを見て、カジンはいったんはファヌンに帰依(?)するかに見えたのだが……？

## 女の嫉妬は怖い——これこそ歴史を動かす原動力……？

カジンが火の力をファヌンに奪われたのは、むしろカジンが望んだことかもしれない。なぜなら、これによってカジンは一瞬心の安らぎを覚えたのだから。しかし、火の力を封じ込めた紅玉をファヌンはなぜか熊族の女セオに与えたうえ、セオにはファヌンの子供を宿すとのこと。そりゃおかしい！ その子の母親は本来私になるべきでは……？ そう考えたカジンが、嫉妬に狂ったのは当然。そして、そこで下したカジンの結論は、熊族を攻めファヌンとセオの子供を奪い取ること。その目的は、子供を人質にしてファヌンに奪われた火の力を返還させることだ。

力で勝る虎族は、カジンの戦略どおりたちまち熊族を制圧。そして今、ファヌンと

セオの間に生まれた赤ちゃんを奪ったカジンは、山頂でファヌンが来るのを待っていたが、そこに現れたのは、子供を返してくれと懇願するセオだった。そして、セオの首には火の力を封じ込めたあの紅玉が……。 「私たちの子供」を返してもらうためには紅玉をカジンに引き渡すのは仕方なし、そう考えたセオだったが、「私たちの子供」という言葉にカチンときたカジンは、冷たく赤ちゃんを山頂から谷の下へ放り捨てたから大変。

ここらあたりの女の闘いを見ていると、2007年12月14日に観た『茶々―天涯の貴妃（おんな）』（07年）における女の闘いと同じようなもので、実に面白い……。やはり、女の嫉妬は怖いと思うと同時に、これこそが歴史を動かす原動力であると実感……。？

### 怒ったセオが黒朱雀に……

谷底に放り投げられた赤ん坊は途中まで来ていたファヌンが無事拾い上げたのだが、それを知らないセオが、赤ん坊を奪われた怒りに打ち震えたのは当然。そこで登場するのが、ファンタジー色豊かな第1話のクライマックスとなる黒朱雀。すなわち、火の力を司る紅玉の主であるセオが怒り狂った結果、姿を変えたのが炎に包まれ、口から火を噴く巨大な黒朱雀。この黒朱雀は虎族の村を襲い、村一面を火の海にしてしまったから大変。怒り狂ったセオが黒朱雀に「変身」しようとするのを察したファヌンは、「セオ、それはやめろ」と制したのだが、その声が届かないほどセオの怒りは頂点に達していたというわけだ。そこでやむなくファヌンは風伯、雨師、雲師を順次呼び、黒朱雀を退治しようとしたが、さてその結果は……。？

ハリウッド大作顔負けの、韓国のTV界の総力を結集したこの一大ファンタジーシーンは見ごたえいっぱいだから注目を。

### 第1話のラストは……。？

しかして、黒朱雀はいずこへ……。？ また、それまで緑豊かだった人間たちの住む村は……。？ 旧約聖書には『ノア方舟』という有名なお話がある。これは、神を忘れ贅沢にふける人間たちを神がこらしめるため洪水を起こした物語。『太王四神記』第1話は、その『ノア方舟』を彷彿させるように、燃えさかる火を収めるために水の神がフル稼働したものの、それによってあの緑豊かな大地は水の底に沈んでしまい、

人間たちも絶滅してしまうことに。

これは明らかに、争いのない人間の社会をつくるため神から地上に遣わされたファヌンの失敗だと私は思うのだが、ファヌンはその責任を追及されるわけではなく、神の国に戻ることになったとのこと。この結論に私は少し納得できないが、神サマが納得すれば仕方のないということ……？

## 今後に残された問題は……？

そこで問題は、ファヌンが神の国に戻るについて、玄武、青龍、白虎、朱雀の四神を地上に残すとともに、「いつの日か神がチュシン国に真の王を遣わすであろう」と予言したこと。この4つの守護神たちはどこに眠り、将来誰の姿に転生し、そしてどんな人間の物語を展開していくのだろうか……？

このファヌンの予言を、ヒョンゴ流に翻訳してスジニに語った言葉は、「チュシン王が現れ、四神のシンボルを見つけてその封印を解いた時、四神は再生し、王はその手に天の力を握るだろう」ということ。したがって、今後の最大の注目点は、チュシン王がいつどこに登場するのかということだが、あれから既に3000年以上。したがって、その登場は間近……？

こんなファンタジー色溢れる第1話だが、カジンを演ずるベテラン女優ムン・ソリとセオを演じる新人女優イ・ジアという2大美女の対決は実に面白い。また、この2人の中心にいる神の子ファヌンのキャラも存在感タップリだし、雰囲気もピッタリ。さあ第2話以降、4世紀末の高句麗を舞台にどんな人間たちの物語が展開されていくのだろうか……？

2008(平成20)年1月7日記